

4. 日本語主語再論：タイポロジーと印欧語古典文法への寄与

金谷武洋

モントリオール大学

Abstract:

Le sujet grammatical en japonais : Contribution possible à la linguistique générale

Dans KANAYA (1997b), nous avons défendu la position de MIKAMI (1960), nous basant sur nos critiques face aux deux points d'appui de KUNO (1973) et SHIBATANI (1978): les expressions honorifiques et le soi-disant «pronom réfléchi» jibun. Nous avons, d'une part, observé que ces deux «preuves syntaxiques» sont non-fondées et, d'autre part, critiqué la Grammaire Scolaire que sanctionne officiellement le Ministère de l'Éducation depuis 1935 et qui prend pour acquis cette notion éminemment indo-européenne du sujet grammatical. Le présent article est un développement naturel des discussions de KANAYA (1997b). Afin d'étayer notre position sur la non-pertinence du sujet grammatical en japonais, nous proposons de quitter la sphère du japonais. Dans un premier temps, les situations syntaxiques des langues est-asiatiques, ainsi que celles de la construction ergative seront analysées. Dans un deuxième temps, nous examinerons la voix médio-passive des langues anciennes indo-européennes. Notre objectif est de contribuer au développement de la linguistique générale, démontrant que la notion du sujet grammatical n'est qu'un phénomène indo-européen récent, loin d'un fait linguistique «universel».

1. はじめに

三上章(1960)の「主語無用論」に反対の立場から久野(1973)や柴谷(1978)は「主語は日本語の構文論にやはり必要である」と主張した。これに対して、彼等の主たる根拠であった尊敬表現と再帰代名詞の二点を金谷(1997b)は考察し、これらが根拠に乏しいとして三上の立場を擁護にした。さらに、その見地から日本語教育における主語の諸問題を捉えなおして、橋本進吉の主語論を土台とした現行学校文法を批判した。主語に代わる用語として、係助詞「は」のマークする名詞句を「主題」、格助詞「が」のマークする名詞句を「主格補語」と呼ぶこと、前者は語用論的ツール、後者は文法的ツールであって、両者を峻別する必要があると主張した。また、日本語教室での実践として、この「主格補語」を動詞文の「益裁ツリー」に位置づけた。

本論文はその発展である。「日本語主語無用論」の傍証として、日本語をいったん離れ、共時(現代の他の言語)及び通時(古典印欧語)の二つの軸から、「主語」が如何に普遍的事実などではなく、時間と共に強化されてきた「インド・ヨーロッパ的現象」であるかを考証する。また、これらの考察を単に傍証としてとどめず、日本語など非印欧語が、様々な分野で一般言語学の発展に新たに寄与できる可能性を示唆したい。とりわけ、本論で扱える能格現象と、中動相の問題は未だに議論の絶えない二分野であり、主語論はそこに大きく貢献出来ることを論述する。

2. 共時的考察：主語論とタイポロジー(言語類型論)

印欧語において、主語は客観的に観察出来る構文的概念である。重要なもののみを列挙しても、多くの印欧語において、(1)文の不可欠要素(2)文頭に来る(3)動詞に人称変化(つまり活用)を起こさせる(4)一定の格(主客)を持って現われる(I/He/She/TheyであってMe/Him/Her/Themなどでない)(5)再帰代名詞に照合する、など顕著な特徴が見られる。(注1)

しかし「主語がある。その特徴はこうだ」というのは実は順序が反対なので、初めから先験的普遍的に「主語」がなければならぬ必要はない。これらの諸特徴を同時に備えた名詞句があればこそ、印欧語に

においては古典ギリシャ語の時代から「主語」そしてそれに対峙する概念として「述語」が「記述」されたのだ。「文は主語と述語からなる」とする「主述関係」はそこに客観的言語事実があったから（生まれるべくして）生まれた訳である。日本語ではどうだろう。上に挙げてきた5点の内、(3)は明らかに認められない。(4)も学校文法では「は・が・に・の」など様々なマーカー付きの名詞句が主語となるのだからとて「一定」とは言えない。(1)は無主語の文が大多数なので、新たに「省略」という別な説明を加えなければならないが、そうすると省略部分を戻すと新たな意味が加わる(注2)ことが説明出来ない。(2)は存在文(例：ここに本がある)においては統計的にも反例の方がずっと多い。久野(1973)などの主張した(5)も金谷(1997b)で見た様に実は成立していない。こうして見ると、江戸時代に発達した国学を代表する富士谷成章(1738-1779)や本居宣長(1730-1801)らがその膨大な資料の実証的考察の中で「主語」を一切語らなかったのは、何より「そこに言語事実としての主語を見なかったから」なのであって、決して大槻が批判したように理論的に未熟だったのではないのである。(注3)

これに対して「主語」を普遍的文法現象であると先験的に見なして、日本語の「主語」と印欧語の主語との乖離を経験的レベルから掛け離れた移動やかきませ、変形の規則で証明する試みは数多い(Saito(1985)Hoji(1985)など)が、その方法論を我々は取らない(注4)。それは客観的構文論とは言えず、事実としての言語現象に立脚しない限り、久野や柴谷のアプローチがそうであった様に、命名ではあっても証明ではなく(注5)、仮説で仮説を説こうとする循環論法の堂々巡りに陥り、結局「そうかも知れないが証拠もない」で終るしかないからである。いづれにしても、日本語教室における主語論は、あくまでも客観的現象としてのそれを目指すべきであろう。以下、本論文の前半では「主語は普遍ではない」ことの傍証として、2-1で東アジアの言語、2-2でバスク語など能格言語における「主語」の構文的特徴を観察することにする。

2-1. 東アジアの言語における「主語」

ここでは朝鮮語と北京語の例を挙げる。Li&Thompson(1976)を参考にしよう。この論文は、主語と主題の二つを対立項目として選び、プロトタイプ(原型)的手法を取る。具体的には、主語支配的(Subject-Prominent=Sp)言語と主題支配的(Topic-Prominent=Tp)言語を両端とした一直線上に諸言語を相対的に位置づけようとしたものだ。結論として、「典型的な主語支配的(Sp)言語」は英語であり、その反対にある「典型的な主題支配的(Tp)言語」は北京語であると言う。朝鮮語は、日本語とともに「主語と主題がともに重要である言語(Sp and Tp)」とされているから、ちょうどこの直線の間中に位置することになる。

この論文が目指すのは、その結論よりもむしろそのアプローチである。金谷(1997b)で述べた如く日本語にも朝鮮語にも「主語」の概念は無用であると我々は考えるので、これら二言語に関する彼等の類型論的位置づけには同意出来ない(注6)。とは言え、彼等が日朝中の三言語のいずれも「主語支配的」と見なしていないことは、それなりに評価してよいだろう。そして、この論文にはさらに瞪目すべき点が幾つかある。北京語や朝鮮語について考える前にそれらに触れておきたい。

先ず、彼等が文法研究における印欧語中心主義(Eurocentrism)から自由になろうと意識していることである。次の主語に関する引用にはその努力が顕著に読み取れる。

< Since the tradition in linguistic studies emphasizes the subject as the basic, universal grammatical relation, grammairians tend to assume that sentences of a language are

naturally structured in terms of subject, object and verbs. (...) in general, it is often difficult to determine the typology of a language in terms of subject-prominent and topic-prominent on the basis of reference grammars since many such grammar are biased toward the subject-predicate analysis. Modern generative linguistics does not represent any advance in this particular area. > (pp.460-461) (下線は金谷)

さらに「主題」を変形の結果とみなしていない点が目される。下はタイ高地で話されているリス語の例だ。(以下、訳、注解ともLi & Thompson)

① Làthyu nya ànà khù - a
 people TOPIC dog bite-declarative
 "People (topic) they bite dogs"/"People (topic) dogs bite them"

② Anà nya làthyu khù - a
 dog TOPIC people bite-declarative
 "Dogs (topic) they bite people"/"Dogs (topic) people bite them"

この言語では、明らかに nya が(日本語での「は」に相当する)主題のマーカーである。①も②も後半の意味が二通りに取れることは、nyaが日本語の「が・を」などの様に動詞との文法関係を示すものでないことを語っている。この言語では文脈のみが後半の意味を決定する訳だ。(注7)

さて、この二文と英語の訳を比べてみると、英文では明らかに主題を持った文が派生的、二次の有標文であることに気付く。それは主として(人称)代名詞のせいである。核となる文は例えば People bite dogs. であり、それを変形し派生させた文が People, (they) bite dogs.あるいは Dogs, people bite (them).だ。ところが、言語が(人称)代名詞を持つということ自体が、何より印欧語の大きな特徴であって、リス語の方には代名詞による「痕跡」がそもそも不在である。ということは、つまり「派生・変形・移動」の構文的証拠がないということだ。これらの言語事実のありのままの観察に拠った Li & Thompsonの次の結論は実を的を得ており、印欧語の先入観から脱れようとする努力がこの点においては実ったことを示している。この立場は、主題をこれまで一貫して変形や移動の結果と見なし続けてきたアプローチに対する根本的な批判となるものであることに注目したい。

< Our claim is that the data which these Tp (=Topic prominent) languages are most naturally accounted for by taking the topic-comment sentences to be basic and not derived. > (p.471)

さて、それでは本題の戻り、Li & Thompsonの北京語の例を見てみよう。

③ Nei-chang huò xìngkuí xiǎofāng-duì lái de kuài.
 that-classifier fire fortunate fire-brigade come adv.particle quick
 "That fire (topic), fortunately the fire-brigade came quickly"

④ Nei-xie shùmu shù-shēn dà.
 those-classifier tree tree-trunk big
 "Those trees(topic), the trunks are big"

これらの例文（特に④）は三上を有名にした文「象は鼻が長い」を直ちに想起させる「二重主語文」である。北京語においても、このタイプの文は珍しくなく、決して特殊な例外的な構文ではない。朝鮮語もまるで同じであることはFavre(1977)から引いた次の例にも明らかである。朝鮮語において日本語との類似点がいかに著しくなるのは、北京語と違って、この言語には、日本語の「は」と「が」にあたる助詞がそれぞれ存在するからである。（注8）

⑤ K'okkiri-nun k'o-ga kilda

象（主題）鼻（主格）長い

「象は鼻が長い」

⑥ Ch'olsu-nun mori-ga ap'uda

チョルス（主題）頭（主格）痛い

「チョルスは頭が痛い」（「チョルス」は人名）

係助詞「は」を巡る最初の大論争というべき1899年の「総主論争」とは上の④⑤⑥に相当する日本文を巡ったものに他ならない。明治維新以後、ウェブスター大辞典の英文法をもとに大槻文彦が（初代の）文部省認可学校文法となった日本語文法を書き、その中で「文は主語と述語よりなる」と宣言した。その結果直ちに生じた「論理と現実のズレ」の為に引き起こされた論争である。文が主語と述語からなるとすると、「象は鼻が長い」の主語は「象」なのか「鼻」なのか、という問題である。ここにも「主語」が降って湧いたように「イデオロギー（思想）」としてあり、それにそぐわない日本語の事実を何とか合わせようとするアベコベの状況が見られる。果たして、それを解決したのが大槻学校文法に続く現行学校文法の執筆者である橋本進吉であったのは興味深い事実である。⑦は橋本の例と説明である。

⑦ 日本人は 毛が 黒い。==> 毛が 黒い。

[主語] [述語節] 主語 述語

橋本は大槻文法の「主語」を守る為に⑦に二重構造を見た。文全体では主語の[日本人は]と述語の[毛が黒い]の二つに分ける。この種の文が特殊なのは、述語がまた主語と述語を持つ文になっているからだ。橋本は指摘し、今度は述語[毛が黒い]をさらに主語[毛が]と述語[黒い]と分析するわけである。（注9）学校文法はこの論争の辺りで一つの危機を迎えたと思われるが、初代の大槻文法から二代目で現行の橋本文法への移行を、日本語にとっては不幸なことに、印欧語的「主語」を温存したまま切り抜けてしまったのである。橋本文法の主語の定義が印欧語の様に構文的ではなく（動作主という）意味論的なものである、という本質的な違いを論ずることも、その正当性を立証する手続きを取りもしないままに。

これら不幸な歴史は全て彼等文法家の目が常に西洋に向いていたせいである。西洋の言語学と文法理論こそが大多数の文法学者には規範的、普遍的であった。上の北京語や朝鮮語の例に見られる様に、こういった種類の文は東アジアではごく自然な文であることを彼等がもっとよく知っていたら、そもそも論争の必要があったとすら思われぬ。「象は鼻が長い」は単に「象について話すよ、鼻が長いね」ということで、「象は」が相手の注意を喚起する為の主題、「鼻が」が主格補語、「長い」がコアとなる述語で、これだけで文として成立していることは、北京語も朝鮮語も変わらない東アジア言語的事実である。主格におかれた名詞句もまた「補語」と見るべきなのは、先のリス語とその英訳でも見た様に、東アジア言語に代名詞は全く義務的ではないからだ。これらはむしろ「必要に応じて使うこともあるというだけの名詞」

である。従って日本語の「長い」は英文では“(It is long)”という文に相当し、「あげた」なら“(I gave (it) to him)”などまで含むことが出来る訳だ。この意味でこそ「麻里を見ましたか」に対する答えの「はい、見ました」が“Yes, I saw her”と同意なのである。「見ました」は「私は彼女を見ました」の省略などではなく、印欧語的代名詞を持たない日本語の答えとしてはこれこそが正しい「文」と言うべきなのである。(注10)

この様に「が」のマークした名詞句を「主格補語」と見なすことが日本語構文論の大きなポイントで、その視点からは「花子は英語が出来る」は「花子は英語を話す」と全くパラレルな構文となる。先ず主題があり、格助詞による補語の提示がなされ、次いで動詞が来るだけだから。前者だけを特殊な構文と騒ぐのは無用、有害なる「主語」のせいである。この「出来る」を英語の発想で<can speak>などと意味解釈するから、この文の「英語」は「対象語」だの(時枝)この文は「二重主語文」だの(橋本)と不要なる疑似問題を作って文法を重くしてしまったり、果ては尊敬表現「お出来るになる」は花子に一致するから主語は花子だ、などという逆さまの論理(久野)になってしまうのである。「出来る」の日本人の発想は「出て来る」であることは、漢字を見ても明瞭である。「英語がスラスラと出て来る」所にこそ日本人にとっての可能の基本イメージがあるのだから、(主語という概念を認めたとしてだが)「出て来る」の構文的な主語は、明らかに「英語」であって「花子」ではない。あえて「花子」を主語と見なすのは日本語を印欧語の眼鏡で見ている結果である。現行学校文法の最大の指標である「動作主」は実は構文論的根拠ではない。ある言語がある行為、状態をどう表現出来るか、したか、のみを構文論では扱うべきである。言語化以前の同じ状況を「富士山が好きだ」と言うか、“I like Mt.Fuji.”というかで認知的選択が対照的であるのは、その好例である。「好きだ」の「主語」を「富士山」でなく(省略された)「私」だというのが学校文法であり、それを支持する久野の立場であるが、構文論からは明らかに成立していない。(注11)

2-2. 能格言語と「主語」

次に能格(ergative)言語の様子を述べてみたい。言語類型論(タイポロジー)の分野で印欧語以外の言語の研究もさかんになされる様になったことは、日本語教育の見地からも極めて喜ばしい。類型論の中には数多くの言語を比較研究して、人類の言語に普遍的な要素を探ろうとする文法学者もいるが、むしろ多いのは言語の違いに目をむけて、これまで普遍的だと思われてきた現象が実はある語族に(例えば印欧語族)においては顕著にみられるものの、違ったタイプの言語には当てはまらない、ということ言語データの観察を通じて指摘するタイプの研究である。このアプローチは、これまで英語を主に人類の典型的な言語と捉えてそこに見られる特徴を普遍文法の名のもとに他の言語にも当てはめようとしてきた生成文法の立場とは好対照をなすものである。我々は言語類型論の立場から積極的に言語相対論的アプローチを取りたいと思う。

さて、能格とは何か。おそらく能格言語として最も研究されてきた言語の一つであろうバスク語の例を挙げてみる。ここでは下宮忠雄の「バスク語入門」(1979)を参照しよう。下の⑧は自動詞文、⑨は他動詞文であることに注意されたい。

- ⑧ Aita dator.
父(主格) 来る。
「父が来る」

- ⑨ Aitak etxea du.
 父（能格） 家（主格）持っている。
 「父が家を持っている」

ここで注目すべきは、印欧語であれば（主語であるから）共に主格であられるべき「父」が、バスク語（など能格言語）においては、自動詞文であるか他動詞文によってその現われ方が変わるといえる点である。すなわち、自動詞文では印欧語と同じく主格（あるいは無標格、ゼロ格、裸の格、絶対格などとも言う）であるのに対して、他動詞文では、主格で現われるのは意味上の目的語の方であり（⑨では「家」）意味上の行為者はkを伴った有標の能格となる現象が見られる。これを表にまとめると次のようになる。

	行為者	受動者（目的語）
バスク語	能格	主格（ゼロ格）
印欧語	主格	対格

これらの能格言語の形態論的構文論的特徴は印欧語の範疇に慣れた文法学者を長いこと悩ませてきた。⑧の方はよいとしても、一体、他動詞文⑨の主語は何なのだろうか。印欧語的に主格を取れば、それは意味上の目的語であって動作主ではない。印欧語では統一されている意味論と形態構文論の特徴が、これらの能格言語の他動詞文では分裂してしまうのである。

我々は能格現象を解く鍵はその定形動詞の活用にあると考える。バスク語の動詞はその「多人称性」(poly-personalism)で知られている。つまり、行為者だけでなく、直接目的語、間接目的語までも動詞の中に抱合的に表現されるのである。例えば⑨の例の動詞<du>には“he has it”の意味がある。動詞が文の最後に来用するという共通点に加えて、バスク語が日本語と似ているのは、「主語」と動詞の関係だ。日本語では活用は一切ない。バスク語には活用があるが、それは印欧語的な「主語の特権」ではない。バスク語動詞の「多人称性」において「行為者」と動詞との排他的な結び付きはやはりないと言えるのである。つまりバスク語の動詞文も（主語だけが動詞に先立つ）クリスマスツリーではなく、（動詞に対して主要な補語が平等な）盆栽型となっている訳である。（注12）

だから、我々はここで、日本語や朝鮮語、中国語でも見られた様に、バスク語においても「主語は存在しない」と主張すればいいのだ。「主語がある」という前提に立つから困るのであって、そう仮定しなければ、話は単に目に見える「主格」名詞句の形態論に帰結する。

さらにもう一点。「印欧語の主格名詞句は積極的行為者を表す」のに対して「能格言語では同じ名詞句が消極的（あるいは被）行為者を示す」と理解する必要がある。ここで鍵となるのは自動詞文における「主格」の認知的な違いである。能格言語では「歩く・来る」などを決して積極的行為とは捉えずに「ただそこに生起する」事象として認知するのである。これは上記の日本語の例「富士山が見える」や「英語が出来る」などと同じ世界観に通じる。これらの日本語が「能格的」表現であると言ってよいのは、そこで主格で表わされる名詞句が意味の上では「行為の対象、被行為者（物）」を示しているからである。私は能格現象にはアニミズム的世界観の現われがあると思う。反例を列挙することで主語の普遍性を無効に出来る日本語や東アジアの言語からのアプローチが、英語中心主義さえ捨てれば、こんな方面にも大いに寄与出来る訳である。日本の国際化が日本語の国際化の時代をもたらしたとすれば（注13）、まさにこうした方向にこそ我々は目を向けなければならないのだ。英語を人類の代表的な言語であるとみなして、その構文的特徴を日本語や朝鮮語に合わせようとする営為ほど不毛で時代錯誤的なことはない。

続いて、印欧語の古典語に目をむけてみることにしよう。印欧語に主語性が強いことはよく言われるがキーンナン（1977）も指摘したように、ある言語における主語性とは結局程度の問題であって、印欧語でさえ、時代を遡れば遡るほど、その主語性がうすれて来ることを以下の部分で明らかにしようと思う。ここでは二つの狙いを持っていることはこれまで同様である。一つは「主語の普遍性」への反例であり、もう一つは印欧語の理解に対する日本語など非印欧語からの寄与である。

3 通時的考察：印欧語中動相と「主語」

Kanaya（1983）は、昔から論争の耐えない印欧語中動相の機能をめぐる諸説を分析し、新たな仮説を提案したものである。ここではそれを発展させ、「主語」との関連で中動相の問題を再考する。それに触れる前に、先ず中動相とは何かから簡単にまとめておこう。

中動相(middle - voice)とは起源的には古典ギリシャ文法の用語(mesôtês)から来ており、その名前の通り能動相(active - voice)と受動相(passive - voice)の中間に位置するものとして理解されて来た。一言で言うと「形は受動、意味は能動」であるものである。印欧語では特に古典語に顕著で、古典ギリシャ語、サンスクリット語、ラテン語などの例がよく挙げられる。とは言えラテン語においては既に中動相は化石的に幾つかの動詞に残るばかりで、例えば「生まれる」(nascor)、「怒る」(irascor)、「話す」(loquor)などある。これらは語尾が - or で終る点では受動相(受身)だが、意味的には能動的である点で、普通の動詞の受動態(例えば「信じられる・信頼される」のcredor)などとは区別されている。

文法用語として定着してしまった「中動相」だが、実に誤解を招きやすい名称である。これでは先ず能動と受動があって、その後に中動が出来た様な印象を与えてしまうからである。実際、ギリシャ文法家が歴史の流れを考慮せずに中動相を理解しようとしたことは、何よりその名称に示されている。しかし歴史言語学的、発生論的にはそうではなかった。能動態と対立する文法カテゴリーとしては中動相が先行し、その中動相が形はそのまま次第に意味を「受身的」に変えていったというのが事実なのである。ラテン語では既にこの原初対立がなくなり、- or で終る動詞は殆ど受動相へと変わっている。(注14) 下に挙げるのはサンスクリット語、及び古典ギリシャ語における能動相⑩、⑫と中動相⑪、⑬の対立である。(便宜上、ギリシャ文字はラテン文字表記に改めた)

- | | |
|--------------|-----------------------------|
| ⑩ (サンスクリット語) | Darsayati. "I show" (能動相) |
| | ↑ ↓ |
| ⑪ | Darsayate. "I appear" (中動相) |
| ⑫ (古典ギリシャ語) | Phaínô. "I show" (能動相) |
| | ↑ ↓ |
| ⑬ | Phaínomai. "I appear" (中動相) |

さて、ここで問題は、サンスクリット語の⑩と⑪も、ギリシャ語の⑫と⑬も、二つとも意味が能動的であるという点である。⑪と⑬はともに中動相であるが、受身でないとなれば、この中動相の機能は果たし

て何か、という点が長年論争のもとになってきているのだ。それはまだ私の知る範囲ではきちんと解決されていない問題なのである。以下にこれまで出された重要な仮説を挙げて見よう。

(a) 伝統的説明

これら印欧古典語の文法書をひもとくと、先ず間違いなく書いてあるのが伝統的説明、「中動相は、行為に主語（行為者）に対する何らかの利害・関心（interest）が含まれていることを示す」（注15）である。上の⑩と⑬を見てみよう。ここで意味される「現われる」は、果たして⑩や⑬の「見せる」に対して「主語の利害・関心」が強いだろうか。「利害・関心」云々はその動詞とは別のレベルの概念であり、これが全く説明になっていないことは明らかであろう。上の例で言えば大きな利害・関心を持って何かを示すことも、どこかに現われることも出来るだろう。またその反対も有り得るではないか。こういった「説明」でない「説明」が何百年来、現代までまかり通っているとは本当に信じ難いのだが、事実である。本稿執筆者が中動相をテーマに修士論文を書いたきっかけは、古典ギリシャ語のクラスで、何よりもこの説明を聞いて「そんな馬鹿な」とあざれたからである。調べてみると、この伝統的説明にあきれて代案を提唱した文法家が数人いること、しかもその内一人は何と日本人であることが分かった。以下、特に重要な3名を挙げることにする。果たして彼等の仮説は的を得たものか、批判的に追ってみよう。（注16）

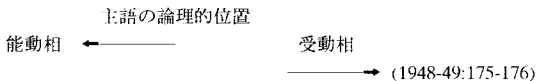
(b) G.ギヨームの仮説

先ずフランスの極めて個性的な文法家であったG.ギヨームがいる。「こんな定義では例外だらけで、当てはまるものより当てはまらないものの方が多い」（1949-50:172）ことに憤慨した彼が「利害・関心の仮説」を排して提案した「中動相の機能」は以下のものである。

「（．．．）中動相は（行為者である）主語がその行為に対して能動的であると同時に受動的であることを示す」（1949-50:171）

「能動的であると同時に受動的」という表現はしかし、ギリシャの文法家たちがそもそも「中動相」と呼んだ立場とそっくりではあることに我々は気付かずにおれない。つまり、ギヨームの仮説による中動相は、時代的には後行する受動相を前提とする時代錯誤ではないか。この疑問の答えが諸であることは、次の図と文によって明確である。

「（．．．）主語が能動的であると同時に受動的とは、論理的には、下図が示す様に両端の中間に位置するというのである。



ここにおけるギヨームの中動相のイメージは、果たしてギリシャ文法家たちのそれと軌を一にしていることは言うまでもない。しかし、その名称とは裏腹に、中動相が受動相に先行した歴史的事実は変えることが出来ないものである。従って彼の定義は無効とせざるを得ない。我々は中動相の機能を「能動と受動の対立」を越え、それとはまるで異次元のところに見い出さなければならないからである。

(c) E.バンヴェニストの仮説

次に同じフランスの言語学者バンヴェニストの説を見ることにしよう。彼もまた、中動相の伝統的説明には納得出来ないとする。

「動詞の他のカテゴリー、例えば、法、時制、人称や数による変化などは明確に機能が分かっているのに、基本的カテゴリーである筈の「相」に関しては、何故機能がかくもあやふやなのか」(1966:170)と彼は自問する。「「利害」などという概念は言語学にまるで関係なく、まるで捉えどころがない」(p.173)と嘆くが、しかしその一方で、ギヨームの落ちた陥穽を極力避けようという努力を忘れない。

「我々は能動・受動の対立に慣れきっている。そこから何とかして脱出しなければ中動相・能動の本当の機能対立は理解できまい」(1966:169)

この意識化において、バンヴェニストの分析には前述のLi&Thompson(1977)とも通じる脱印欧語への意欲を感じる。ギヨームと違うのは何よりもその通時的接近法である。(c)のギヨームが中動相を共時的に捉えてギリシャ文法家たちを越えられなかったのに対して、バンヴェニストはその論文の冒頭で次の様に宣言するのだ。

「比較文法学者が受動相は中動相から生まれたことを明らかにして既に久しい。印欧語の相において先ずあったのは能動相と(伝統的用語を使えば)中動相の対立であった」(1966:168)

バンヴェニストはこの歴史の見地に立って中動相の機能をとらえようとする。彼がここでわざわざ「伝統的用語を使えば」と断っているのは、これが通時的には的確な名称とは言えず、誤解を招く危険性を意識したものであることは言うまでもない。彼が中動相に変わる新しい用語を彼が提案するののもその認識の上のことである。彼の提案は能動相を「外相(diathèse externe)」中動相を「内相(diathèse interne)」と呼ぶことである。この外、内とは行為や状態が「主語の外に出るか、内に留まるか」を指すもので、いずれも主語の存在を前提としているのは明らかである。

印欧語が原初備えていた能動相と中動相の機能対立を発見する為にバンヴェニストの取った手法は面白い。彼は幾つかの印欧古語の中で、動詞に依っては能動相、あるいは中動相しか取らないものがあることに注目した。そこで「能動、中動のいずれも取りうる動詞と違って、これら例外的な動詞は、その語彙的意味に既に能動的あるいは中動的機能が含まれているために重複を避けるからだ」という仮説をたて、二つの相の機能対立は、これらの語彙の意味から抽出出来ると考えた。古語のうち出来るだけ2つの、多くは起源を共にする動詞のみを挙げている所にも彼の用心深さが示されている。

では以下に彼の挙げている例を眺めてみよう。(S:サンスクリット語)(G:ギリシャ語)(L:ラテン語)(A:アヴェスタ語)

・能動相しかないもの：(いる S:asti / G:esti) (行く S:gachati / G:bainci)
(流れる S:aravati / G:rei) (這う S:sartpati / G:erkei) (折る S:ghujati /
G:pheucei) (吹く S:vāti / G:aēs) (食べる S:atti / G:edei) (生きる S:jivati
/L:viviti) (飲む S:pibati / L:bibit) (与える S:dadāti / L:dat)

・中動相しかないもの：(寝ている S:scte / G:keimai) (回復する S:nasate / G:neomai) (興奮する S:manyate / G:mainomai) (座っている S:âte /G:émai) (死ぬ S:moriyate / L:morior) (従う S:sacate / L:sequor) (主人である S :patyate / L:potior / G:ktaomai / A:xsayate) (喜ぶ S:bhunkte / L:fungor) (生まれる G:gignomai / L:nascor) (耐える L:patior) (計る G:médomai / L:medeor) (話す L:loquor)

バンヴェニストはこれら2つの動詞群の意味上の比較から次の判断を下す。「これらを突き合わせると明らかな対立が浮かび上がってくる。(…)能動相のみの動詞は、その行為が主語に発して他に向かう。中動相のみの動詞では(…)行為、状態は主語がその座であり他に向かわない。行為、状態の内部に主語がある」(p.172)

バンヴェニストの提案はギョームのそれに比べて歴史的整合性の点で格段の進歩を遂げている。しかしその結論に我々は同意出来ない。まず、方法論であるが、能動相のみ中動相のみの「対立のない」例外的な動詞を横に並べて、その語彙的意味を問うというアプローチは科学的と言えるだろうか。しかも、ここで比べられているのは相としての能動でも中動でもなく、それらを捨象した地平での動詞の辞書的意味であり、そのこと事態が仮説の域を出ないものである。ある文法事項に言語的意味があるとすれば、それは対立においてでしかない、というのはソシュール以来の鉄則ではなかったか。着眼は面白いが、あくまでもヒント、参考程度にしかならないもので、それを根拠にする結論は勢い説得力に欠けたものである。

次に結論そのものだが、「他に向かう動詞」とは「他動詞」とどう違うのだろう。そして「行為や状態が主語にとどまる動詞」も結局「自動詞」と同じことではないか。もし自他の差が能動相と中動相の差であったとすれば、それらは現代印欧語のみか東アジア言語にも重要な対立概念である。それなのに何故、印欧語の中動相というカテゴリーは消えたのか。消えたものが自他の対立としてまた蘇ったのか、その経緯の説明も一切なされていない。

またここに挙げられた動詞を見ると、バンヴェニストの結論にそぐわないものが多いのに気付く。例えば「他に向かう動詞」として「いる・行く・生きる・流れる」などが挙げられるのは不自然ではないか。同様に「耐える・計る・話す・従う」などこそがむしろ「他に向かう動詞」の様に思えるが、これらは「行為や状態が主語にとどまる動詞」の側に入っているのも首肯出来ない。日本語に翻訳したせいで本来の能動相、中動相の特徴が失われたのであれば、今度は一見バンヴェニストの仮説に合っていると思われるものも全て検証し直す必要があろう。少なくとも、そもそもの大前提であった「あまりに動詞の辞書的な意味が能動相、あるいは中動相的なので」と言えるほどの意味的な差はないという印象は否めない。以上の理由から、天才の名をほしいままにした比較言語学者バンヴェニストもまた、「ミイラ取りがミイラとなった」と我々は判断する。

(d) 細江逸記の仮説

ギョーム、バンヴェニストに先だって、実は日本にも印欧語中動相の本来の機能を発見しようとした文法家があった。1928年の論文「我が国語の動詞の相(Voice)を論じ、動詞活用形式の分岐するに至りし原理の一端の及ぶ」を書いた英文法学者細江逸記がその人である。このいかめしくも時代を反映した題名の論文は様々な点で誠に興味深く、もっと注目を浴びてよい労作である。(注17)しかも、この中で、細江は「基本的には印欧語の中動相は日本語の助動詞「る・らる」と基本的には同じものだ」という驚くべき主張をしているのである。

まず細江は、一般に思われているほど印欧語と日本語は違わないと主張し、共通点は特に動詞の相において著しい、と直ちに本題に入る。日本語の助動詞「る・らる」（口語では「れる・られる」）がその機能として「可能・自発・尊敬・受身」を持つことに注目して、実は印欧古語の中動相も（日本語に完全に一致してはいないが）様々な機能を担ったものだ、と説く。中動相の多機能性を示すものとして、細江の挙げている例を見てみよう。(p.97-98) 英文法の専門家らしく、英訳も彼のものである。

(サンスクリット語) namati (能動相)	"he bends"
↑ ↓	
namate (中動相)	"he bends himself" (反照) (注18)
	"he is bent" (受身)
	"he bows" (自動詞)
(古典ギリシャ語) phaínō (能動相)	"I show"
↑ ↓	
phaínomai (中動相)	"I show myself" (反照)
	"I am shown" (受身)
	"I appear" (自動詞)

印欧語と日本語の共通性に対する洞察力の鋭さは、特に1920年代という時代を考えると、敬服せざるを得ない。細江の上張の素晴らしさは、まだタイポロジー的な考えが未発達だったこの時期に、起源を異にする言語(群)同士にも「充分比較研究は成し得る」(p.96)と捉えていたことである。彼の視点ははるかに同時代人を凌駕していたと言ってよいだろう。(注19)

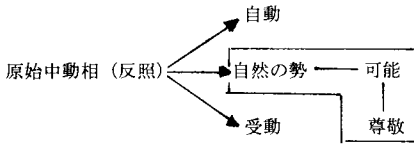
さて、論文の題名が示す様に、中動相のコア概念とその分岐の様子を通時的に追う試みが論文の第二部ではなされる。細江の結論は以下の三点にまとめられる。

- (i) 印欧語には本来「受身・受動相」はなかった。あったのは能動相と中動相の対立である。
- (ii) 中動相は日本語の助動詞「る・らる」と本質的に機能が一致しており、そのコア概念は印欧語も日本語も「反照」である。そこから「反照⇒受動、自動」と分岐発展した。これを「反照、受動、自動の法則」と名付ける。
- (iii) 受身が本来不在なのだから、能相も中相も広義の能相に含まれる。紛らわしいので前者を「過向性能相」（ある動作が甲から出て乙に向向し、その乙を処分する）、後者を「非過向性能相」（＝反照性能相）（動作は行為者を去らず、その影響は何らかの形式において行為者自身に反照する）と呼ぶ。

上記の(i)と(iii)が前述のバンヴェニストの仮説とそっくりな様子はどうだろう。「反照」を「行為者自身への影響」と捉える点では伝統的説明の「利害・関心」にも通じる所がある。ギョームの説は論外としても、フランス言語学会の大家バンヴェニストに（通時的にも共時的にも）40年近く先じた事実は細

江の名誉の為にも記憶されなくてははいけない。おまけにこの時代に「その言語事実は日本語にもある」と大胆にも指摘したにも拘わらず、今では人々の記憶から遠ざかっているのは日本の言語学界の名誉のためにも誠に残念である。

まさに日本の誇るべき細江の論だが、明らかに失敗と思われるのは「反照 (= 再帰)」を中動相の原始 (コア) 概念としたことである。細江は、印欧語にはない日本語独自の中動相の発展として、「反照、受動、自動の法則」は守りながら、さらにもう一本の機能分岐が起こったとして、それを「自然の勢」(p.111)と名付ける。「る・らる」に見られる可能や尊敬の機能はそのさらに下位部分として位置付けられるのである。下図がその経緯を示している。(p.112) 枠内が日本語に置ける独自の発展である。



この図に説得力がないのは、そもそもどうしてこの順序なのか、という論理が充分明らかに示されていないからである。僅かに、現代の印欧諸語の受身、自動詞文が双方とも時として再帰文で置き換えられる、という指摘があるばかりである。(P.100 - 101) 例として受身の意味を持った「この単語はどう発音されますか(イタリア語: Come si pronunzia questa parola?)」「この商品は売られている(スペイン語: Estas mercancías se venden)」自動詞文に匹敵する「ドアが開く(仏語: La porte s'ouvre/ドイツ語: Die Tür öffnet sich)」などが見られる。

ここで細江は大きな過ちを犯してしまった。これらの「言い換え可能性」は共時的事実であるのに、それを通時的説明に援用したことである。中動相と受動相との歴史的整合性に関して注意を怠らなかつた細江にしては全く信じ難いことである。言うまでもないことだが、再帰構文は、印欧語にあってさえ、かなり後期に発展したものであることは既に多くの本に指摘されていることだ。(注20) 細江の「反照、受動、自動の法則」は、これらの機能分岐が見られるという論理なら正しいが、通時的にこの順序で分化したという主張なら明らかに誤りである。やはり、英語学者の細江に伝統的「利害・関心の仮説」の影響は大きかつたのであろう。

細江の過ちは日本語(や他の東アジア諸語)ではさらに明らかとなる。これらの言語では再帰構文は現在ですら定着しているとは言い難いからだ。橋本の次のことばに我々は深く同意せざるを得ない。

「(. . .) 日本語では、後にも、反照的語法は発達しないし、我々の言語意識として「自らをどうする」といふやうに考へるのは不穏当に感ぜられる。それよりも、「自らさうなる」といふのが、日本的の考へ方ではなからうか」(1968:289-290)

以上、3人目の学者として細江逸記の論を紹介し、批判した。注目すべき内容ながら、結論としては、中動相の機能を細江もついに明らかに出来なかつたというのが我々の判断である。以下、Kanaya (1983)を発展させた我々の考えを明らかにしたい。

(c) 無主語文からの視点

我々は2つの考えに啓発された。第一は細江の「印欧語中動相を日本語の視点から解く」という大胆な試みである。結論はどうあれ、この積極性には魅力を感じた。日本語もまた世界の言語理解に貢献出来る筈である。第二には比較文法の立場で「受身」の機能を問い直した研究である。特にA.メイエの研究には大いに影響を受けた。

受動相に中動相を解く鍵があると思われたのは、何よりも前者が後者から発展したという歴史的事実による。更に、バンヴェニストのアプローチと違い、少なくとも受動には能動との「対立」が現在もある。対立があるから、動詞そのものの語彙的意味を問うことなく受動の機能が推し量れる筈である。受動の機能は、全部とは言わずとも一部は中動相の機能を残している、と我々には思われた。

生成文法の変遷においてチョムスキーの標準理論(1965)が1972年の拡大標準理論へと変更を迫られた一つの理由が受身文にあったことも我々は注目した。受動文は核となる能動文の構文を変形して得られる、とする標準理論はここで意味論の立場からの多くの反例を突きつけられたのである。例えば数量を含む文で「多くの人が僅かの本しか読まない」と「僅かの本しか多くの人に読まれない」は意味がかなり異なること、英語などに多い報道記事での擬人表現(例「1963年が大統領の暗殺を目撃した」)が受身文(「大統領の暗殺が1963年に目撃された」)とはなりにくいことなどが標準理論では説明できなかったからである。

既に今世紀始め、受動文は能動文の裏返しではない、と明確に宣言しているのはソシュールの弟子、メイエである。

「受動文の本来の役割はある行為や状態の過程において、行為者が考慮されないことにある。(…)もし受動文が能動文と紙の裏表の関係にあるだけであれば、その役割は無意味であろう。受動態を言語表現のツールとして我々は重宝しているのは、何よりもある行為を人為的な介入とは捉えず、あたかも自然にそうなったと表現する所にある」(1921:195)(下線は金谷、以下も同様)(注21)

これを別な観点から指示した学者にサンスクリット語などの研究で有名なゴンダがいる。ゴンダは受動文に(変形であれば現われる筈の)行為者(英語ではby...)が実際にはほとんど現われないことに注目した。そしてその傾向は印欧語の古いものに殊に顕著である。1300もの中世ドイツ語の諺に行為者を伴う受身は皆無であり、ローマの詩人プラウトゥス700行の作品で僅かに2例、中世フランス語の叙事詩「ロランの歌」では400行の中に3例である。ホメロスの「イリアード」の始めの6巻はおよそ500行あるが、その中に行為者を含んだ受身文は5つしかない。ゴンダはこれらの資料をも踏まえて、サンスクリット語の受動態の機能を次の様に説明する。

< Suffice it to say that in many cases the starting point (=the subject) is altogether out of question and does not come into mind of the author; the process is not brought by an agent; but it occurs 'automatically', it happens, it comes to pass, that is all > (1951:74-75)

さらに注目すべきなのはゴンダの次の発言である。

< As a result of statistical investigations made by some pupils of Jespersen's, we now know that 70-94% of the passive sentences in various English texts contained no agents. Yet, English has it comparatively often. > (p.4)

受動文の本来の機能が「行為者を表現しないこと」にあること。その証拠として時代を遡れば遡るほど構文としても文から行為者の姿が消えていくこと。この2つの言語事実と、受動態が中動相に発している事実を突き合わせてみれば、現代語における受動態は、その本来の機能から次第に遠ざかっていきつつあることが分かる。そして、その逆方向に時代を遡れば、受動態の「本当の機能」と中動相の機能は一つに収斂すると言ってよいだろう。我々の結論はここで明らかとなった。「印欧語古語には、行為者を前面に打ち出す能動相と対立する文法カテゴリーとして中動相があった。その機能は行為者の不在、自然の勢の表現である」上記の能格言語同様、ここにもアニミズムの世界観の発露をみることが出来るということである。中動相は実は印欧語における無主語文なのである。勿論、中動相にも人称変化はある。その人称語尾の歴史的変遷（対象のマークから動作主のマークへ）に關しての詳細な議論はKanaya(1983)を参照されたい。また、日本語の動詞における自他の機能対立が、形態的にも意味的にも使役や受身と直線で繋がっていることは金谷(1997a)で述べた。

4. むすび

日本語主語論の発展として、一般言語学の難問とされてきた2つの問題について考察した。タイポロジーの分野で研究の進んでいる能格言語だが、その前提において印欧語的先入観の根本的な壁に突きあたっている論文が少なくない。これと同様に、過去の中動相機能を巡っての宝さがしも、この同じ印欧語的先入観に邪魔されたが為に実を結ばなかったと思われる。その先入観の最たるものが「主語」を普遍的概念とするものであることは本論文で明らかになったと思う。

能格言語も、その構文はかなり詳細に記述されながら、一体「何故」能格という現象があるのかについての議論はまだ不十分である。前述の様に、能格言語は主語のない盆栽ツリーで説明出来るし、その機能は「無主語文」であると我々は述べた。中動相に関して言えば、本論で検証した全ての仮説で構文上「主格」とそれ以外の何らかの文法格の共存が見られた。伝統的説明では「利害」という考えだから、これは「主格(が)」と「与格(に・のために)」の共存である。(I do it for/to me) ギョームは能動と受動の狭間に中動相の機能を求めたのだから「主格(が)」と「対格(を)」を同時に一文に見たことになる。(I see him and he sees me) バンヴェニストとは言えば、行為者に行為の場所を措定することにより彼は中動相が「主格(が)」と「位格(で・に)」を共有するとした。(I grow in myself) 最後に紹介した細江は再帰を中動相の古層に見たのだから、再帰文内での「主格(が)」と「対格(自身を)」の重複である。(He bends himself)

ここには、もうこれ以外の可能性はないほど、主格以外の文法格が使われた様子が見える。しかし、これらの文法家の誰一人として、主語(行為者)そのものの必然性、普遍性を検証してみようとはしなかった。これ迄の幾多の議論が結局袋小路に陥っているのは、その先入観から脱し切れていないからである。日本語や東アジア諸語が一般言語学の問題を解決出来る可能性として、能格言語と印欧語古典語の中動相の二つは期待の持てる分野だと思う。

とりわけ他動詞を起源とする助動詞doの大きな働きにおいて、今や典型的な「する言語」(池上1977-78)となってしまった英語を人類の代表的な言語とみなすのは、角田の地口を借りればまさに一人よが

りな「Eigo(Ego) - centrism」である。これほど特殊な英語的事実を、むしろありふれた東アジアの一言語である日本語に適用させようとする空しい努力ではなく、それとは逆に日本語（や東アジア諸語）が一般言語学に寄与出来る方向を探る方がどんなに生産的で、どんなに21世紀の時代の要請に叶っているか知れない。既に陳腐な表現となった「受信から発信へ」だが、明治以来の不幸な日本語の（学校）文法の抜本的改革を通じて、日本語教育と一般言語学への貢献という二重の国際的寄与が今ほど求められている時はない。

注

1. キーナン(1977)はそうした特徴を30あまりにまとめてある言語がそれらの特徴を幾つ備えているか調べることで主語性の程度の強さをはかることを提案したが、列挙した特徴があまりに印欧語の性格を帯びていることで批判された。(Johnson1977, Foley&Van Valin1977,角田1991など)また、題名に惑わされてこの論文が次第に「主語の普遍性」のチェックシートの役割を帯び、「Xという言語にはこれこれの特徴があるから主語を認めるべし」とする風潮が生じた。
2. 例えば「何故来たんですか」に対して「何故あなたが来たんですか」では「他の人が来ると思った」意味が新たに加わる。いわゆる料理文「最後にチェリーを載せます」に「私たちは」を加えると「他の人はそうしませんか」と聞こえる。
3. 「主語、客語、説明語、修飾語の語脈などに至りては、さらに思いいたらぬこととて、主語に属するテニハも、客語に属するテニハも主客の別なく論ずるなど、かかる識別力にて、如何にしてか語格を説く、と怪しまるるばかりの事なり」（『広日本文典序論』1896）
4. このやり方で行けば、ほとんど何でも言えてしまう。例えば全ての言語において普遍的に/f音があると言える。ない言語については「この言語では変形の結果、/fは/p/(など)に変わる」と言えばいい。その際に、これまた目に見えない「深層構造」などは「深層」における普遍が「表層」において変化すると説けるので、殊の外便利だ。しかし、これらはもはや客観的経験科学としての言語学ではない。検証出来ない仮説は仮説で終るしかない。日本語の「主語」の様に、本来存在しないものを「あるが変わった」「あるが見えない」というのも同断である。日本語は「裸の王様」ではない。
5. < the subjecthood of an NP (in a sentence) is a matter of degree >: Comrie (1981:132)
6. 一言で言えば、彼等が日本語と朝鮮語を「主語も主題も同じように強い言語」を分類したのは、それぞれを担当する助詞があるからにすぎない。それが日本語では「は」と「が」である。次の文の分析にその様子が見てとれる。単文内での比較であるため、ここには主題のピリオド越え、コンマ越えなど、主格補語とは比較にならない語用論面での働きぶりは一切不問に付されていることは言うまでもない。

Gakkô-wa boku-ga isogashi-katta
schoolTOPIC I-SUBJECT busy PAST
< School (topic), I was busy >

逆に、北京語を「典型的な主題支配的言語(Sp)」としたのはマーカ―としての助詞がないためである。しかし、マーカ―がないために文脈によっては主格補語と解釈出来るのだから、中国語をもって「日朝両語よりもずっと主題中心言語」と言える根拠はないように思える。インドネシア語を英語と同じ様な「主語中心言語」と分類した点については崎山(1993)の批判がある。崎山はインドネシア語も「主題中心」であると反論している。

7. 日本語の「は」は古いが、格助詞の「が」と「を」はそれぞれ連体助詞「君が世・我が国」と感動詞「Wo!」からの転用で、これら2つの格助詞は古代にはなかった。その時代の「あいづらは犬食う」「犬はあいづら食う」を考えると丁度このリス語の2文に相当し、やはり後半があいまいな文となる。

8. 係助詞「は」に相当するのは、その前の名詞が子音で終れば - un、母音なら - nun。格助詞「が」にあたるのは、子音の場合に -i、母音の後では -ga となる。
9. 解決案とは言え、橋本の説明はそもそも「総主論争」のきっかけを作った草野清民 (1871 - 1901) の提案に手を加えたものである。草野は「は」に導かれた語を「総主」、「が」が続く語を「主語」と言った。我々の立場は草野の総主を「主題」と言い換え、「主語」を「主格補語」とするものではあるが、橋本の様に二段に分けて考えず、「は」と「が」を違うものと解釈した点で草野は橋本より我々に近い。
10. 和訳すべき英文や仏文の代名詞をカッコに入れておくと学生は日本的発想に慣れて来る。例えば、"No, (I) didn't buy (it)" という様に。言うまでもなく「いいえ、私はそれを買いませんでした」と言う日本人はまずいない。主語の問題と (人称) 代名詞の問題は、「人為を前面に立てる」と言う「する言語」的発想において底で繋がっているのである。
11. 「Nが好きだ」に対応する構文は印欧語にもある。例えばフランス語の "X me plaît" (英語の "X pleases me") に相当。この英仏の文の主語が me であると思う人は少ないだろう。勿論、主語は X でしかありえず、語順、活用など「構文的証拠」がある。
12. ツリー比較は金谷(1997)を参照されたい。
13. 田中克彦(1993:25)に的を得た主張がある。
14. 一方、固定してしまい、能動相との対立がもはやない中動相は deponents と呼ばれる。「取り残された語」の意味である。
15. 例えば、< Le moyen (...) indique que le sujet prend un intérêt quelconque à l'action > *La grammaire grecque*, E. Ragon, 1979
16. 他にも中動相に関心を寄せた学者はいる。しかし、多くの場合、結論にいたるまでの論理がスッポリ抜けてしまっている。例えば山下正男「新しい哲学」(1966) また英文法の大家イエスベルセンは次の様に悲観的である。< On the middle-voice as found, for instance, in Greek, there is no necessity to say much here, as it has no separate notional character of its own: sometimes it is purely reflexive (...), sometimes a vaguer reference to the subject, sometimes it is purely passive and sometimes scarcely to be distinguished from the ordinary active(...) > Jespersen (1924:168)
17. この貴重な論文の存在を教えて下さったのは、筆者の修士論文執筆当時、ハーバード大で日本語と江戸文学を教えていらした板坂元氏である。
18. この「反照」は今で言う「再帰」のことである。
19. 同様の主張が Hjelmslev(1963)や Martinet(1962)などに見られる。
20. 例えば Serbat (175:133-134)
21. このメイエの定義を見て想起するのは板坂元氏の紹介している父親のエピソードである。開業医だった父親が診断書を書く時の心得として「向こう二週間の安静加療を要する」とは書かずに「要すると認められる」と書いた方がいい、と語ったという内容で、こうしておくことによって、もし診断書が法廷に持ち出された場合、医者は責任を逃れることが出来るというのである。ここにも能動態の「人為」に対する受動態（ここではむしろ自発だが）の「自然」の機能対立が何えて興味深い。(板坂1971:68)

参考文献

- 三上章 1975 「三上章論文集」くろしお出版
 三上章 1960 「道は鼻が長い」くろしお出版
 橋本進吉 1969 「助詞・助動詞の研究」(橋本博士著作集8) 岩波書店
 北原保雄 1981 「日本語」(文法・No.6) 中央公論社

- 大野晋 1993「係り結びの研究」岩波書店
- 久野 章 1973「日本文法研究」大修館書店
- 柴谷方良 1978「日本語の分析」大修館書店
- 時枝誠記 1954 「日本文法口語篇」「岩波全書」岩波書店
- 鈴木孝夫 1975「閉ざされた言語・日本語の世界」(新潮選書)新潮社
- 角田太作 1991「世界の言語と日本語」くろしお出版
- 大野晋・丸谷才一 1981「対談」「日本語の世界」付録8 中央公論社
- 板坂元 1971「日本人の論理構造」講談社現代新書
- 下宮忠雄 1979「バスク語入門」大修館書店
- イ・ヨンスク 1996「国語という思想・近代日本の言語意識」岩波書店
- 山下正男 1966「新しい哲学」培風館
- 田中克彦 1993「国家語をこえて」ちくま文芸文庫
- 金谷武洋 1996「日本語と日本人の自然観」カナダ日本語教育振興会Newsletter(12)
- 金谷武洋 1997a「受身と使役は連続線の両端」カナダ日本語教育振興会Newsletter(14)
- 金谷武洋 1997b「現行学校文法60年の功罪」カナダ日本語教育振興会論文集1
- Saito, M. 1985 Some Asymmetries in Japanese and their Theoretical Implications, Ph.D. Dissertation, MIT
- Hoji, H. 1985 Logical Form Constraints and Configurational Structures in Japanese, Ph.D. Dissertation, University of Washington
- Keenan, E. 1976 "Towards a universal definition of subject" in Li (ed.) Subject and Topics, New York, Academy Press
- Benveniste, E. 1966 "Problèmes de linguistique générale, 1" Gallimard, Paris
- Gonda, J. 1951 "Remarks on the Sanskrit Passive", E.J.Brile, Leiden
- Guillaume, G. 1948-49 "Leçons de linguistique de G. Guillaume" PUL, Québec
- Jespersen, O. 1924 "The philosophy of Language", Allen, London
- Meillet, A. 1921 "Linguistique historique et linguistique générale", Champion, Paris
- Serbat, G. 1975 Les structures du latin, Collection connaissances des langues, Picard, Paris
- Comrie, B. 1981 Language Universals and Linguistic Typology, Oxford, Basil Blackwell
- Kanaya, T 1983 "Sur la valeur fonctionnelle de la voix moyenne indo-européenne", Master thesis, Université Laval
- Kanaya, T 1997 "La notion de sujet en japonais", Ph.D. Dissertation, Université de Montréal